

安田講堂事件から 40 年

これを書いている 2009 年 1 月 18 日からちょうど 40 年前に安田講堂事件あるいは安田講堂攻防戦というものがあった。現役の大学教員の中で、この事件を知る人は少なくなかった。一般人、とくに若い世代は、安田講堂事件と言われても何のことだか全く分からない人が多かろう。

それでも、今朝の朝日新聞は天声人語欄でこの事件を取り上げた。また、日本テレビは今日 14 日の夜 8 時からの 2 時間ものとして、ドラマ化されたドキュメンタリー番組「東大落城」を放映した。したがって、この事件は、人々の記憶から完全に消え去ったというわけでもないようだ。

1968 年の半ばごろから、東大では学生紛争が激化していた。これは、その前年から続いていた医学部の紛争において、医学部学生を十数名処分したことに端を発したもののだったが、折から日大でも起きていた紛争とも重なり、学生紛争は全国の大学に波及する様相を見せ始めていた。また、当時勢力を伸ばしていた新左翼の介入もあり、一大学の問題が社会問題に拡大して行った。

東大本郷キャンパスの中央に位置する安田講堂の建物には、その当時、総長室と大学事務の中核があった。この建物が 1968 年 6 月から学生によって占拠され、1968 年の秋ごろから学生ストライキが各学部で始まり、事実上、大学の教育・研究機能は停止してしまっ

た。学部・研究科によって、状況はさまざまであった。私が助手として勤務していた理学部化学教室では、研究を継続することは不可能ではなかったが、実際問題として、研究に専念できる雰囲気ではなくなった。毎日助手仲間が集まって、議論をして、自分たちで何かしようということになったこともあったが、いざとなると、意味のあることができる状況ではないことが直ぐに分かった。

1968 年の末ごろには、もう東大だけで問題を解決できる見込みはなくなっていた。そして、1969 年 1 月 18 日の朝を迎えた。この日は冬晴れの非常に良い天気であった。私は、その前夜から研究室に泊り込んでいた。18 日に何かがあるという確実な情報が伝わっており、若手教官とくに助手の相当数が泊り込んでいた。当時私は、もう少しで 32 歳になるところだった。

18 日の早朝、警視庁機動隊 8,500 人の導入が伝えられた。私が泊り込んでいた化学教室旧館（安田講堂の裏手にあるこの建物は現在化学東館と呼ばれている）は、1915 年竣工の古いが風格のあるもので、東南を向いているその玄関から外に出ると、左手に東大病院、右手に御殿下グラウンドがあり、それらの間を通る広い道路の南端に竜岡門が見える。化学教室旧館から竜岡門までの距離は 400m ぐらいであろう。

竜岡門の外に、ジュラルミンの盾を持った機動隊隊員が整列しており、その盾に朝日の光が反射して、きらきらと輝いて見え

た。これは忘れられない光景であった。その直後に機動隊は本郷キャンパスに入った。カマボコ型をしたバスのような機動隊輸送車も多数入ってきて、御殿下グラウンドはそれらの駐車場になった。当時の御殿下グラウンドの表面は未だ人工芝になっていなかった。

学生たちが占拠していた建物は幾つもあったが、その本丸はもちろん安田講堂であり、医学図書館、正門脇の工学部列品館などが出城になっていた。それらの出城がまず陥落し、18日の昼ごろから、機動隊は、安田講堂を取り巻く形で、放水車による強烈な放水と催涙弾発射をしながら、バリケードで内部から固めた玄関入口などをこじ開けようとした。これに対して、籠城している学生は、コンクリート敷石などを割ったものや火炎ビンや火炎ビンを屋上から投げて、応戦した。火炎ビンを受けて、火ダルマになる機動隊員も出たが、その火を放水車が容赦ない放水で消し止めた。もちろんその機動隊員はずぶ濡れになった。1月の寒い日のことである。

安田講堂に向かって、右側の道を隔ててやや高いところに浜尾新(明治時代の総長)の銅像がある。私は、その辺りから、安田講堂攻防戦の一部始終を見ていた。ヘリコプターが真っ青な空から舞い降りてきて、屋上に居る学生めがけて、白い粉のようなものを撒いた。これは催涙剤を水に溶かしたものだったようだ。催涙ガスというものは嫌なものだ。それが安田講堂の回りに立ち籠めていた。

安田講堂は18日中には陥落せず、19日の午後になって、ようやく陥落した。安田講堂の中に居て逮捕された学生は、東大全学共闘会議(全共闘)の学生と他大学から応援に来た「外人部隊」から成っていた。前者よりも後者の方がずっと多かったことが、多発した大学紛争において安田講堂事件が持つ象徴的な意味を表していた。彼らは、学外に連行されるとき、化学教室と御殿下グラウンドとの間の道を歩かされた。私は

その様子を2階の研究室から窓越しに見ていたが、彼らが疲れ切っていることは明らかであった。

安田講堂事件は2日間で終わったが、その後遺症は長く続いた。古くから続いてきた大学の自治という考え方は、この事件で大きな痛手を受けた。総長を頂点とする教授会の権威は元ほどではなくなったが、その後も教授会は大学運営の中枢機関としての機能を失ったわけではなかった。しかし、大学の運営には複雑な要素が付け加わることになった。

この事件、もっと一般的に言えば、この時期に世界中で起きた大学紛争というものの社会的意義は何だったのだろうか。これは、その後ずっと今に到るまで、私には分からないことである。この事件において私は傍観者に過ぎなかった。だからこそ、よく見えていたことはあると思うのだが、それだけで何かが分かるというわけではない。当時学生で、安田講堂に籠城して、逮捕された人も、この点についてはよく分からないようだ。その一人である島泰三氏は2005年に「安田講堂1968-1969」(中公新書)を出版した。この本で、同氏は、自分が事件に主体的に関わったことを後悔していないと語っているが、事件そのものがもつ意味には触れていないように見える。また、1月14日の日本テレビの番組に出演した東大の現役教授も逮捕された一人だが、事件の意味は未だに明らかでないという趣旨の発言をしていた。

この事件にいろいろな形で関わって、その後の人生に大きな影響を受けた人たちは、学生側と教官側の双方にいる。そういう人たちの意見を丹念に聞けば、何かが見えてくる可能性はあると思うが、私はそこまでするつもりはない。今、私が感じていることは、この事件は、日本経済が高度成長する最中に起きたものであり、日本の社会に起きつつあった、いろいろな変化や歪に関係した社会現象だったのではないかということである。したがって、同じような事件

が今後日本で再び起きることはないだろう。
(おわり)